
狸と貉

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狸と貉

【Nコード】

N8953P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

森の皆にいつも間違えられる狸と貉。それで彼等が取った行動は。本当にそっくりさんというものはいるものです。

第一章

狸と貉

狸と貉は同じ穴に棲んでいました。

そこは貉が掘った横穴で狸はそこに同居しています。

二匹はそれぞれとても仲良しです。その外見もかなり似ています。それで、です。二匹は森の外に出るといつも間違えられます。

「あれ、狸さん？」

「さっきここにいませんでした？」

ある日貉がです。こうもりの兎達に言われました。

「どうしてまたいらしたんですか？」

「忘れ物ですか？」

「いや、僕は貉だよ」

貉は苦笑いを浮かべて兎達に答えます。

「狸君じゃないよ」

「あれっ、間違えました」

「すいません」

「そうだよ。僕は貉だからね」

こう兎達に言います。そして狸もです。

「よお、貉」

「今日も元気そうだな」

木の上からです。小鳥達に声をかけられます。

「今から何を食べるんだい？」

「あんたの好きな野苺ならそこに一杯あるぜ」

「僕はどっちかっていうと山葡萄の方が好きなんだけれど」

狸はこう小鳥達を見上げて言いました。

「それは貉さんじゃないか」

「おっと、狸だったか」

「そっちだったのか」

「そつだよ」

こう彼等に答えます。

「僕は狸。貉さんじゃないよ」

「悪い悪い、あんまり似てるからな」

「何か最近よく間違えるな」

「いつもじゃないか」

また小鳥達に言います。

「それって」

「似てるからなあ」

「そつくりだからな」

こう言われる始末でした。とにかく彼等はお互いによく間違えられます。そうしたことが続いています。二匹はその棲家の横穴の中で話をするのでした。

「あの、貉さん」

「わかつてるよ、狸君」

貉はすぐに狸の言葉に答えました。二匹はお互い向かい合って胡坐をかいて座つてです。そのうえでそれぞれ腕を組んでいます。仕草もそつくりです。

「間違えられるんだね」

「それもいつもですから」

「困ったねえ」

「困りましたね」

そしてお互い言います。

「僕達種族は違うのに」

「一緒に住んでるだけでね」

「そうですよね」

狸は困った顔で貉に話します。

「どうしたらいいんでしょうか」

「まずは森の皆に聞いてみるかい？」

貉はここでこう狸に提案しました。

「ここはね。そうするかい？」

「皆にですか」

「そう、皆に」

また狸に話します。

「それでどうかな」

「そうですね」

狸は少し考えてからです。貉の言葉に答えました。

「それじゃあ。今から」

「皆を集めてね」

「僕達を見分けてもらいましょう」

「そうしよう」

こうして森の皆に集まってもらいました。森の中の広場に来てもらつてです。そのうえで二匹で並んで前に出て皆に尋ねるのでした。

「それだけでなく」

「いいかな」

貉と狸はそれぞれ彼等に言います。

「僕達が何処がどうそれぞれ違うか」

「ちよつと見てくれない？」

「おいおい、難しいことを言つな」

その彼等に最初に言つたのは狐でした。右の前足で彼等を指し示しながらです。そのうえで彼等両方に対して言つたのである。

第二章

「あんだ達を見分けろって？」

「うん、そうだけれど」

「どうかな」

「そんなのできないよ」

こう彼等に告げます。

「とてもね」

「できないって？」

「難しいのかな」

「難しいなんてものじゃないよ」

狐はまた二匹に言います。

「そっくりじゃないか、何から何まで」

「そうだよね、本当に」

「同じ種族にしか見えない位に」

「そっくり」

他の動物達も狐に続いて言います。

「誰がどう見てもね」

「そっくりだし」

「見分けつかないわよ」

「それじゃあ困るんだよ」

貉がそれを聞いてこう反論しました。

「見分けてもらわないとね」

「僕だつてそうだよ」

狸も言います。

「間違えられるのは気分がよくないよ」

「だからここは」

「とはいっても」

鼬が腕を組んで困った顔で答えます。

「二人共ねえ」

「そうそう、見分けられないから」

「とてもね」

鼯の言葉に他の森の住人達も言います。とにかくわからないというのです。

「二匹共そつくりだから」

「何処がどう違うの？」

「それで見分けるって」

「無茶を言うよね」

「ううん、それでもさ」

「見分けてもらわないと」

「そつだよ」

「困るから」

二匹は困った顔で話します。とにかくどうにかして見分けてもらいたいのです。けれどこの場合は皆見分けようがないと言って終わってしまいました。二匹は困った顔で横穴に戻ってです。そのうえでまた話をします。

「何か全然区別がつかないってのは」

「困りましたね」

「うん、全くだ」

貉が狸に対して言います。

「僕達は確かに似ているけれど」

「それでも、見分けられないっていうのは」

「困ったなあ」

「どうしたらいいですかね」

「そつだね。とにかくさ」

貉はまた言いました。

「外見じゃとても区別がつかないんだよね」

「そうですよね、僕達の外見じゃ」

「何か目印があればいいんだけどね」

「目印ですか」

「そう、目印」

それだということです。猧は難しい顔で話します。

「目印があればいいんだだけね」

「そうですか。目印」

猧は猧の言葉を聞いてです。あらためて考える顔になって。それでこう言いました。

「少し考えたんですけど」

「うん、何かな」

「帽子でも被りませんか？お互いに」

「帽子？」

「はい、帽子です」

こう猧に提案するのです。

第三章

「僕が狩猟の時の羽根付き帽子で貉さんがシルクハットって感じで」

「そうした感じでなんだ」

「それぞれ違う帽子を被りません？」

「それを目印にするんだ」

「これならわかりますよね」

貉に対する話を続けます。

「それならどうでしょうか」

「そうだね。いいかもね」

「ええ、じゃあ早速そうします？」

「思い立ったが吉日だしね」

貉も狸の言葉に頷きました。そうしてでした。

「それじゃあ」

「はい、それじゃあ」

「二匹で」

こう話して二匹は早速それぞれ違う帽子を被ってみました。貉がシルクハットで、狸が狩猟の白い羽根のある帽子で。それを被ったのでした。

そしてそのうえで森の中を歩くとです。もう誰も彼等を見間違えませんでした。

「ああ、貉さん」

「狸さん」

その帽子を見て挨拶をします。

「こんにちは」

「お元気そうですね」

「うん、今日も宜しく」

「楽しくやりましょう」

二匹は笑顔で皆のその挨拶に応えます。

そのうえで、です。お互いに話すのでした。

「いや、帽子を被っているだけで」

「見分けてもらえるようになりましたね」

「そうだね、たったそれだけで」

「有り難いことですね」

「全くだよ」

二匹は今は横穴の中で猿酒を飲んでいます。それと一緒に山の幸を食べています。見分けてもらえるようになって二匹でお祝いをしているのです。

「そうか、こうすればいいんだ」

「外見がそっくりなら目印を身に着ける」

「それでいいんだな」

「それで」

そんな話をしながら楽しく飲んでいます。そして食べています。

「じゃあこれからも」

「そうだね、帽子を被っておこう」

「間違えられない為に」

二匹で笑顔で話をするのでした。お酒と御馳走を楽しみながら。もう二匹を間違えることはなくなりました。二匹とはそのことにずっと幸せを感じていました。

狸と貉 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8953p/>

狸と貉

2011年1月2日21時55分発行